

IDACAだより

第12号 平成26年7月15日

● 編集発行
(一財)アジア農協振興機関
責任者：平岡啓治
東京都町田市相原町 4771
TEL: 042-782-4331
FAX: 042-782-4384

規制改革会議「農業改革に関する意見」に対する海外からのメッセージ

IDACAは設立以来、発展途上国の協同組合関係者に、研修を通して日本の農協組織の現状、主に総合農協の利点について紹介してきました。これまでに多くの途上国で日本の農協システムをモデルとした農業協同組合が設立されてきました。そのような中、5月に政府の規制改革会議から提示されたJAの総合事業や中央会制度の廃止、准組合員の利用規制といった急進的な農協改革案は大きな衝撃を持って受け止められました。またその情報は海外の協同組合組織にも大きく取り上げられました。JA全中に寄せられた各国の協同組合関係機関からのメッセージの一部をご紹介します。

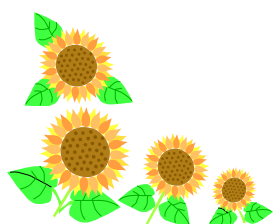
組織名・代表者名	メッセージ要旨
国際協同組合同盟 (ICA) 会長 ポーリン・グリーン	<p>この改革案は、特に組合員による所有と管理という、協同組合のまさに根本的は原則を明確に攻撃するものです。日本の農業協同組合をモデルとした農業協同組合が世界中で発展しています。また、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた人々のための復興の取り組みに際し、農協組織が果たした多大な貢献を忘れてはなりません。</p> <p>この改革案は協同組合の価値や原則を完全に無視するものです。日本の農協運動が解体され、このような形で組合員の権利が損なわれることについて、世界中の10億人の人々からなる世界の協同組合運動全体が、日本の協同組合の仲間たちと共に反対します。</p> <p>改革案に対抗する取り組みへのICAの全面的な支援と私自身の関わりをお約束します。</p>
ICA 欧州地域 会長 ディレク・レーンホフ	<p>ICA 欧州地域の会長として、農協の仕組みを破壊しようとする日本政府の現在の試みについて、私は深く懸念するものです。ドイツのライプハイゼン運動の一員として私は、全国の農家の生活を守るための強い農協組織の重要性はよく理解しています。そこでは、単位農協を支えるための全国組織は絶対に必要であり、農家組合員の意思のもとに置かれなければなりません。</p> <p>私はこの危機的な状況にある日本の協同組合運動に対する私たちの支持を表明するとともに、私たちの全面的な連帯を約束します。</p>

(次ページに続く)

《目次》

- 「農業・中央会改革案」に対する海外からのメッセージ..... 1
- 研修事業報告 3
 - (1) アフリカ・アグリビジネス研修
 - (2) 第1回 ICA 中核リーダー育成研修
 - (3) 第2回 ICA 中核リーダー育成研修
- 海外調査報告 6
 - (1) フォローアップ報告 (ブータン・ネパール)
 - (2) アルバニア調査報告
- 編集後記 8

組織名・代表者名	メッセージ要旨
韓国農協中央会 (NACF) 会長 チェ・ウオンピョン	<p>JAグループと日本の農業が直面する、解体と大変動が起こりかねない前途を懸念します。この農協改革案は行き過ぎであり、もし採用されれば、改革どころかむしろはるかに大きなダメージとなるのではないかと案じています。</p> <p>今回の改革案は、農家による組織よりも投資家が所有する企業を好むような全体的に反農的のものとなっています。農業は基本的な産業であり、生きるために必要なものの一つを人々に与え、人と自然の主要な接点であることを強調したいと思います。</p> <p>韓国農協中央会は、JA 全中を支援し、協同組合運動を広げ、協同組合の価値・原則を守るための努力を惜しみません。</p>
中華民国農会 (NFA) 理事長 シャオ・チンティエン	<p>中華民国農会を代表し、日本政府による農協組織に対する弱体化・解体の試みという、協同組合運動を攻撃するような改革案に反対します。東アジア農協協力協議会 (EAOC) の一員として、私達は日本の農協を発展させ農業者の権利を守る JA 全中を全面的に支持します。</p> <p>私達は皆様を助けるためにどんなことでもさせていただきます。</p>
モンゴル農協中央会 (NAMAC) 副会長 アルタンテューヤ・ツェデンイシ	<p>日本の農協組織は、農業分野において重要な役割を果たしてきました。協同組合組織が国の経済や組合員の生活を守るためにこれまで行ってきたことは計り知れません。</p> <p>日本の農協組織は、モンゴルのような発展途上の国々にとっても模範となる素晴らしい総合農協のモデルを創り出してきました。</p> <p>モンゴル農協中央会、そして私自身、日本の皆様がおかれた現在の状況をよく理解し、この問題への皆様の取り組みに対し、同じ協同組合に携わる同志として全面的に支援します。</p>
インド農民肥料協同組合 (IFFCO) 理事長 バルビンダー・シン・ナカイ	<p>ICA そして EAOC のメンバーとして、私共は、日本の農協組織を弱体化させ、さらには解体させるような政府の提案に深い懸念を覚えます。日本は、小規模農業／家族農業のリーダーとみなされてきました。革新的な技術や日本の農村社会で実践されてきた事例は、開発途上国のいたる所で手本とされてきました。日本の農業協同組合は、常に日本における協同組合運動発展の先頭に立ってきました。</p> <p>私共は、この厳しい状況におかれる日本の農業協同組合を全面的に支援し、協力することをお約束します。</p>
国際労働機関 (ILO)	<p>協同組合は、世界の女性・男性の生活と仕事の質を向上させることのできる重要な存在であり、また、国や投資家主導の企業からは見向きもされない地域でさえ、大事なインフラやサービスを利用できるようにすることのできる重要な存在であると ILO は考えています。</p> <p>ILO の活動は、協同組合についての国際基準、すなわち「協同組合の促進に関する勧告」に従って行われています。同勧告は ICA の協同組合原則に言及しており、なかでも最も重要な原則である組合員による協同組織の民主的運営に言及しています。</p> <p>私達は農協が地域社会に深く関わり、農業や食料確保だけでなく、市場へのアクセスや、災害からの復旧・復興のための社会的な取り組みなど様々な分野において貢献していることを理解しています。</p>



<研修事業報告>

(1) 2013 年度 JICA アフリカ・アグリビジネスコース

「アグリビジネス」をテーマに対象をアフリカ地域（16 か国 18 名）に絞った JICA からの受託研修が 2013 年 10 月から 11 月にかけて実施されました。現地研修は長野県、大分県そして山梨県で企画され、長野県では飯山市を拠点にツーリズムを含めた地域資源を活用した農業・農村振興の事例を、大分では、「一村一品」運動の取り組み事例、実習を通じた商品開発の考え方、山梨県ではワイン製造、有機栽培等について学ぶことができました。研修員にとっては、村から国の段階それぞれに組織化された農協の取り組み、生産から販売の仕組み、農産物

加工のみならず地域資源を活用した様々な事業の可能性を考察する貴重な研修になりました。



JA はだの管内の農家訪問



プライベートでもお付き合い



JA 北信州みゆき
理事 荻原 育夫

当 JA は長野県の最北端に位置し、唱歌「ふるさと」の発祥地でもあります。IDACA とは、十数年のお付き合いになり、アジアの国々、特にアセアン諸国の皆さんとの交流を多く経験させていただきました。なかでも、タイの皆さんとの交流が数多く「日本の田舎、文化」を楽しくお伝えできたと自負しています。

以前、IDACA に講演に伺い「私の住んでいる飯山は、歴史・文化があり、とても環境の良いところで、うまいものや楽しい行事がいっぱいあるよ」と話すと、本当に次の回から大勢の皆さんに来ていただきました。笑いころげるほどの付き合いをさせていただきました。

「プライベートで日本に行く機会があったら、荻原に会っておいで」と言われることに喜びを感じております。

アフリカの各地から 20 数名のお客様においでいただいた時、私は地元 JA の段取りやアポイントに走り回り、スムーズに中味の濃い研修をして頂きました。自然環境の異なる地での農業や暮らしの話、そしてお母さんたちが元気に伝統食の研究や懇談する機会も設定することもできました。

今、私の集落にタイの中部からお嫁に来てくれた女性がおります。その「ラン（蘭）ちゃん」とは、毎日の暮らしのなかで楽しくお付き合いをしております。



JA 北信州みゆき関係者の皆さんと懇親会

(2) 2013 年度第 1 回 ICA 中核リーダー育成支援研修

10 ヶ国から 11 名が参加し、2013 年 11 月 19 日から 12 月 14 日まで IDACA で実施された本研修では、JA の組織と事業概要、日本の農産物流通、JA の共済事業、JA の教育活動や人材育成等の講義に加えて、東京近郊および山梨県・神奈川県下で日帰り視察が実施され、大田市場、齋藤農園と JA こまの選果場、JA 神奈川教育センター、JA 全農 営農・技術センターを訪問いたしました。

12 月上旬には、千葉県下で現地研修が実施され、JA 千葉中央会、JA 全農ちばの営農技術センターと青果集品センター、JA 山武郡市、JA ちばみどり、古谷乳業を訪れ、関係者から県下の農業、生産者組織、農業振興計画などに関する説明を受け自国の農業・農協振興に有益な情報を数多く頂きました。師走の多忙な時期に本研修にご協力頂いた関係者各位の真摯な態度に研修員一同大変心を

打たれたようで自国に戻って農協の育成・発展に心血を注ぐ決意を新たにしました。研修員は最後に、研修で得た知見を基に自国の農協発展に資するアクションプランを完成させ、12 月 14 日に帰国の途に就きました。



山梨県齋藤農園訪問。齋藤さんご夫妻を囲んで

**ICA 農協中核リーダー育成支援研修を受入れて**

研修員の皆さんにプレゼントした「よい食プロジェクト」の笑味ちゃんパッチ。着けてくれているかしら…?

千葉県農業協同組合中央会
農業振興部 部長 蔦津 昌明

昨年 10 月に IDACA から「千葉県の JA で、海外からの視察団の現地視察研修を受け入れてほしい」という突然のオファー。しかも研修期間は、設定されており、期日までは、一か月余り。当方は、全くの経験値なし。はてさて、どうしたものやらと戸惑うも、「ここは、千葉県の意地見せたらか！」と、JA にあたりをつけて東奔西走。何とか期間内での内諾を得て、ミッション達成。

しかしこれで、終わりでは無かった。最終日（12 月 5 日）には、「千葉県の農業と JA の現状」について講義を行うという最後の関門が待っていたのだ。「海外から来た方々に如何に関心をもってもらいながら、理解してもらおうか」思案投げ首の日々が続いた。

12 月 2 日の全農県本部営農技術センターを皮切りに現地研修会は、順調に進んだ。JA や各施設の研修会に、業務の都合で帯同できなかったことが誠に無念。

いよいよ、12 月 5 日。県農業会館に視察団をお迎えする日。私の講義の日。

おそろおそろ千葉県の農業・JA について語った。冬なのに脇の下には、汗しみ発生。このときほど通訳の方の有難味と我が英語力の情けなさを感じたことはなかった。

講義が終わって、視察団の方々より拍手があったときは、一寸涙目に。何はともあれ、大きなトラブルなく全日程を終えることができ胸をなで下ろす。よい経験をさせて頂きました。感謝！感謝！

(3)2013 年度第 2 回 ICA 中核リーダー育成支援研修

2013 年度 ICA 農協中核リーダー育成支援研修の第 2 回目は 2014 年 3 月 17 日から 4 月 11 日までの 26 日間、IDACA で実施しました。

ブータン、カンボジア、インド、ラオス、マレーシア、ミャンマー、ネパール、スリランカ、タイ、ベトナムの 10 カ国より計 11 名の研修員が参加しました。

現地研修は広島県を訪問。JA 広島中央会、JA 三次、JA 広島北部、JA 全農パールライス、(株)サタケ、JA 厚生連吉田総合病院、広島市中央卸売市場等を訪問させていただき、JA グループの中山間地における農業振興の取組みや地域活性化の取組みなどを中心に研修を行いました。高齢化、過疎化といった深刻な問題を抱えながらも JA を中

心とした様々は事業活動を展開することによって地域の活性化を図っている事例は、アクションプラン作成に大変参考になったと高い評価を得ました。



JA 広島中央会 村上会長（中央）を囲んで



JA は広島のお好み焼きの味？



広島県農業協同組合中央会
企画広報部 次長 唐崎 文彦

広島の"OKONOMI-YAKI"は研修員の皆さんに大うけだったようです。東京へ帰ってから何度かお好み焼きにトライされたようですが、どうも広島の味とは違っていたとか。

海の幸、山の幸、たくさんの具が一つにまとまり、絶妙なバランスで食べられるお好み焼きと同じように、JA グループ広島の様々な事業や活動も一体感をもって行われています。

中央会にお越しいただいた際は、短い時間でしたが「活力ある人づくり」を中心に教育活動の重要性について常務理事からお話しさせていただきました。

その後、広島県内での研修に同行させていただきましたが、習慣や文化の違いもあり本当に個性豊かな研修員の皆さんと触れ合う機会を持てたことは貴重な経験でした。また皆さんから出される様々な質問やご意見には、こちらが考えさせられ、また学ぶことが多かったように思います。

JA の仕組みや事業内容について、十分ご理解頂けたかわかりませんが、JA は地域に密着した活動を行い、人と人とのつながりを大切にする組織であるということは分かっていただけたのではないかと思います。



JA 厚生連吉田総合病院にて院長先生、役職員の皆さんと

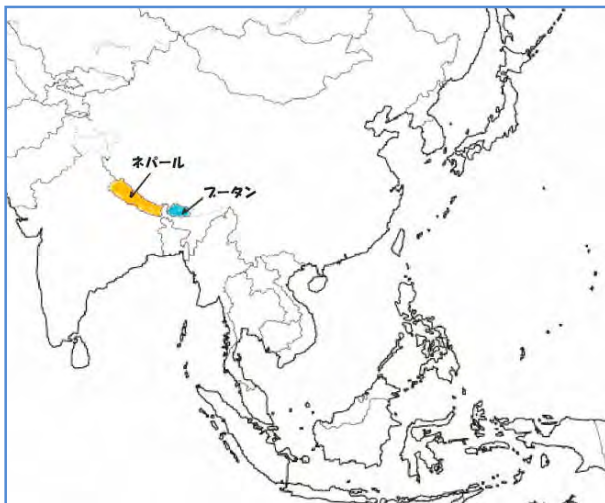
<海外調査報告>

(1) ネパールとブータン

IDACA 常任講師、I & YOU 倶楽部会員
原田 康

先ず両国の位置を見ると北は中国、しかもチベットで国境はヒマラヤ山脈が屏風のように立ちはだかっている。南はインドで、よく見るとネパールとブータンとの間にはインドのシッキム州が楔のように入っているため両国は東西と南と三方をインドに囲まれている。

ネパールは北海道の約 1.8 倍の大きさで人口約 2,649 万人 (2011 年)、首都はカトマンズ、一人あたりの GDP は 717 ドル (2012 年)、ヒンドゥー教徒が 81%、主要産業は農業である。



ブータンは九州とほぼ同じ面積で人口約 72 万人 (2012 年) 一人あたり GDP は 2,399 ドル (2012 年)、チベット仏教が国教で首都はティンブー、主要産業は農業である。参考までに日本の一人あたり GDP は 46,707 ドル (2012 年)。

大国に挟まれ、地下資源のない国がどのように独立を保ち、発展をするか両国は二つの道を選択している。ネパールは経済成長路線で水力発電の電力をインドへ販売、ヒマラヤのトレッキングや寺院の観光で積極的な成長路線を取っている。一方ブータンは、急速な成長路線はいずれ行き詰まってひずみが格差となって社会不安となり、大国の介入で独立も危なくなるとの分析から GDP に代わる指標として GNH (Gross National Happiness) 国民総幸福論を国の目指



パロ市内にある八百屋さん (ブータン)。端境期のため地元野菜はキャベツのみ 90% がインドからの輸入 (写真右端は筆者)

す方向として、経済的なものだけではない豊かさとは何かを国を挙げて追及している。

ブータンのユニークさを象徴するものとして、乳牛は搾乳量が減っても、鶏は産卵率が落ちてもそのまま餌を与えて飼っておく。家畜を"経済動物"とみず"家の畜"として命を大切にする。ブータンは家畜も幸福だ。

ブータンでは"バター茶"を日本のお茶のように飲むのでバターやチーズ、ヨーグルトや牛乳の需要が多い。訪問をした農家では搾乳の半分は自家用にして販売は残りの半分であった。ネパールもブータンも飲用乳は殺菌が義務付けられてはいるが農家が搾ったままや簡単な殺菌をして小売市場や直売所で販売をしている。



ティンブー市内にある食品小売市場 (ブータン)



**ティンフー郊外にある酪農協同組合の
組合員農家訪問 (ブータン)**

いずれ殺菌や衛生的な取り扱いの規制が厳しくなると設備と販売のルートを持つ大手の乳業メーカー以外は販売が難しくなる。

農業を見ると両国ともに山岳地帯に張り付いたような農地が多く、小規模の家族経営である。水はヒマラヤからの雪解けや雨水の利用となるので集落単位の共同作業、助け合いが不可欠である。消費地までの道が悪く、農家は車がないので販売は業者中心である。農協やグループの共同販売も行われているが、野菜も果実も価格形成が規格別ではなくまとめて kg いくらのために農家への精算方法が課題である。

コメはようやく自給が出来ているが野菜、果実はインドから来ており、訪問をした 2 月は両国ともに野菜の端境期であったのでティンフーの小売市場の野菜、果実のほとんど、カトマンズの卸売市場も約 70%がインドから来ていた。



カリマティ青果市場視察 (ネパール)

野菜、果実なども流通の仕組みの構築が課題である。ブータンの首都ティンフーにはまだ卸売市場と言えるような取引の場所がない。ネパールのカトマンズには市の中心部に卸売市場があり早朝から千人近い卸、小売業者が取引をしている。荷捌所、売り場、通路が狭く活況というよりも混乱といった方がピッタリの取引の場である。農家がこのようなところで販売することはできないし、農協がここに売り場を持つて自ら販売をしていたが取引は規格別ではなく“一山いくら”の売り方なので輸送費や経費、出荷者への精算方法等で商人と比べて共同販売のメリットを出すことは難しい。



カトマンズ郊外の組合員農家圃場視察 (ネパール)

両国とも経済成長で大型店舗のシェアが高くなると流通の合理化が求められる。各国の商慣習に合った卸売市場を地方、首都に開設して公正な取引、価格の公表、代金決済のルールをつくり小規模農家が直接販売先の選択が出来るような仕組みを作ることが課題である。このような流通の柱が出来ると共同販売のメリットを出す方法を工夫することが出来る。

両国とも農村は日本の 1950、60 年代の姿で都市は現在の先進国と同じである。インドの政治・経済の影響を受け、更に農産物が大量に運び込まれている状況の中での農家の収入をどのように確保するか、日本の農家、農協が高度成長を乗り切った経験が役に立つ。

(2) アルバニア国農業協同組合育成調査

2014年3月より2か月半にわたり、国際協力機構（JICA）の委託を受けてアルバニアの農業・農民組織の現状と課題に関する調査を実施しました。アルバニアは1992年に民主化革命を行い、それまでの社会主義体制を改め、資本主義経済への移行に取り組みました。他の社会主義国の市場経済化と比べ、革命とはいっても平和裏に民主化が進められました。それまでの国営農場や集団農場は解体され、



マケドニア向け輸出のための選果作業

IDACA 海外協同組合開発コンサルタント
照沼 弘



シュコドラ県のハーフ生産者とその関係者
(筆者は左から3人目)

66万ヘクタールの農地が30万の農家に分与された結果、小規模な農家が新しく誕生しました。しかしこれらの農家は資金がなく、農機、販売施設や倉庫などがいないため不利な販売を強いられています。そのため共同販売や共同購買をして、生産コストを低減し、さらに有利な販売をすることが必要となりました。現在約20の農業協同組合が設立されていますが、まだ設立後間もないため、今後の発展が期待されています。

編集後記

サッカーのワールドカップが佳境を迎えている。パソコンの普及と研修員の個室用テレビの老朽化に伴い、個室のテレビ廃棄処分が決まり、研修員用のテレビはロビーにある大型テレビのみとなった。現在実施中の研修はアフリカからの研修員が多く、その中にナイジェリア人がいたため、ナイジェリアが出場する試合では皆がロビーのテレビの前に集まり、一際大きな声援が飛び交っていた。

イスラム教の断食、ラマダンが6月28日から始まった。今回はちょうどワールドカップの開催時期と重なる。日の出から日没までは一切の食事を断ち、水も飲まない。この断食は開祖ムハンマドがメッカでの布教を諦め別の土地に移動する際の苦難を体験するために行われるものだそうだ。したがって、飲食物の摂取量を減らすことや、苦痛を得ること自体が目的ではない。あくまで宗教的な試練として課される。また、食べ物に対するありがたみを感じさせるためとも言われている。イスラム教の研修員はもちろんラマダン実行中である。しかし日没から夜中にかけて大量の飲食をするため1ヵ月の断食期間中に体重を増やす研修員も多い。

